

スポーツをめぐる美学的諸問題

樋口 聡

序

ここに掲げた「スポーツをめぐる美学的諸問題」という表題に、違和感を持つ人は少なくないに違いない。その違和感は、まずは、「芸術研究」という場においてスポーツについて語ることに對して、そして第二には、スポーツを美学的に論じることに対してであろう。仮に第二点、すなわちスポーツを美学的に論じることには何らかの妥当性が見出されたとすれば、その「美学的」ということを媒介にして、芸術を論じる場には、スポーツを引き出すことに意味を見出すことができるかもしれない。逆に、第一点、すなわち芸術について語る場にスポーツを登場させることが可能なほど芸術とスポーツの間に何らかの関連が認められれば、「芸術」ということを媒介にして、スポーツを美学的に考察する手掛かりが与えられるかもしれない。いずれにしても、少なくとも二つの疑問、すなわち「スポーツと芸術の關係」と「スポーツと美学の關係」が、ここにはある。

序論として、まず「スポーツと芸術の關係」について考えてみよう。芸術をめぐる問題と同じ枠の中でスポーツを論じるとした場合まず考えられるのが、スポーツを芸術とみなすことである。「スポーツは芸術か」ということはこれだけで一つの問題を成しており、スポーツを芸術だと言う人もいれば芸術ではないと言う人もいる。筆者もこの問題について論じたことがあり、筆者はスポーツは芸術ではないと考える。⁽¹⁾仮にスポーツが芸術だとすれば、芸術の研究にスポーツが登場するのは当然ということになる。スポーツは芸術ではないとしても、スポーツは芸術とみなせないかといったことが問題となるということは、スポーツと芸術の何らかの関連を物語るものであろう。スポーツと芸術を比較してみると、いくつかの類似点を見出すことができる。例えば、スポーツも芸術も日常生活からは一定の距離をおいた、広い意味での遊び、遊戯の領域に属することとか、スポーツも芸術も概念的な知識だけではない直観性や体験の直接性が要求されることとか、あるいは両者には技術、熟練、技巧性が必要であることなどである。スポーツは芸術と同一の行為ではないと

しても、或る観点からすると非常に近い領域とみなすことができるのではないかと思われる。⁽²⁾

さて次に「スポーツと美学の関係」を考えてみよう。この場合の美学とは言うまでもなく学問としてのそれである。⁽³⁾ 美学という学問を、広く美的現象や美的価値の問題を研究する学問と捉え、その考察の対象を芸術に限らないとすると、自然や人間に見出される美も当然美学の対象となりえる。一方、スポーツにさまざまな美的現象が存在することは事実である。したがって、スポーツの美が美学の対象となりうることは当然予想できる。もちろん、スポーツを美学的に論じることにはいかほどの意義があるのかは検討されなければならないが、いずれにせよスポーツを美学の考察の場に設定してみることは、スポーツに美が見出される以上可能である。事実、「われわれ美学の研究者にとっては、スポーツは、⁽⁴⁾ 学の対象として、きわめて示唆的かつ魅惑的であり、人間美の巨大な宝庫なのである」と述べる美学者もいる。

芸術との類似という点と、美的現象の存在という点の両者から、スポーツを美学的に論じる可能性を、今われわれは仮定することができる。本稿では、スポーツを美学的に考察する際の諸問題から二つのトピックを選び、スポーツ美学の展望を図ることを目的とする。二つのトピックとは、「技術美としてのスポーツ運動の美」と「スポーツ実践者の美的体験」である。それに入る前に、まずはスポーツを美学的に論じるこれまでの研究の概要を見ておくことにしよう。

一 スポーツ美学研究小史

スポーツ美学はスポーツ哲学の一領域として位置付けられている。そうすると、まずスポーツ哲学について説明しなければならないであろう。主にアメリカ、そして若干のイギリスや西ドイツの研究者によって、一九七二年の暮れにスポーツ哲学会 (Philosophic Society for the Study of Sport 略称 P S S S) なる学会がアメリカで結成された。それ以前にも、オリンピックでのスポーツ科学会議などでスポーツに関する哲学的な研究発表がなされている。⁽⁵⁾ その基本的な問題は、スポーツは近年ますますさかになるが、スポーツとはそもそも人間にとって何なのか、人はなぜスポーツをするのかなどといった問題を含んだ、スポーツの価値あるいは存在意義の探究である。また、アマチュアリズムやオリンピックなどの問題に対処するという実際的な意味も持っている。この学会の設立には、スポーツ科学を主に学んできた研究者とスポーツに関心を寄せる一般の哲学者の両方が関係している。学会創設の会長は、日本ではあまり知られていないがアメリカでは著名な哲学者ポール・ワイスである。彼については、平凡社の『哲学事典』では、『パース全集』の編集者の一人で、存在論と認識論の統一をめざす一方、記号論理学の研究に従事している、と紹介されている。(なお、この事典での見出し「ヴァイス」は誤りである。) また、西ドイツの哲学者ハンス・レックも関与している。彼はカールスルーエ大学で哲学を教えており、レックラムからの *Pragmatische Vernunft* など多くの著作を持つ現代ドイツの中堅哲

学者の一人である。『哲学の変貌——現代ドイツ哲学——』（岩波書店）に含まれるオットフリート・ヘッフエの論文に、レンクの名前は登場している。ちなみに、彼はオリンピックのゴールド・メダリスト（ボート、ローマ・オリンピック）でもある。このスポーツ哲学会は毎年機関誌を発行しており、これまで十四巻が出ている。

さて、スポーツ美学の研究史について概括的に述べると、スポーツ美学というような研究分野が注目されはじめたのは、一九七〇年代になってから、それも主に英米においてである。それ以前にも、また英米以外の国々にも、スポーツの美的側面に着目したりスポーツと芸術の関わりを指摘するような論文や著書はある。しかし、論文の数や問題の取り上げ方、論述の深まりといったことを考えると、スポーツ美学なる研究分野は英米を中心に七〇年代になってようやく歩き始めたと言える。国際的に見てスポーツ美学はスポーツの哲学的研究に含まれながらこれまで展開されてきた。例えば、一九七四年に発行されたスポーツ哲学会の機関誌『スポーツ哲学研究』の第一巻には、スポーツの美的研究に関する論文が四篇収められている。その他、この十数年間に、スポーツ哲学に関する著作が数冊、アメリカ、イギリスなどで出版されているが、「スポーツと美学」などの項目でスポーツの美的研究を含んでいる。ガーバー編『スポーツと身体…哲学的探究』⁽⁶⁾（一九七二年初版、一九七九年第二版）、オスターハウト『スポーツの哲学』⁽⁷⁾（一九七三年）などがある。スポーツの美的考察を直接のテーマとした著書で主なものは、一九七四年にロンドンで出版された『スポーツ美学論集』⁽⁸⁾とベンジャミ

ン・ロウの『スポーツの美』⁽⁹⁾（一九七七年）である。

一方、わが国ではどうであろうか。一九三〇年に書かれた中井正一の「スポーツの美的要素」、そしてそれとほとんど内容的に一致する「スポーツ美の構造」（執筆年不明）がまず上げられる。さらに中井には「スポーツ気分」の構造」（一九三三年）という重要な論文がある。⁽¹⁰⁾ 中井のこれらの論文は、英米の諸研究に先駆けるものである。その後中井に続くスポーツの美的研究は十分に展開されなかった。ようやく一九七二年に勝部篤美の『スポーツの美学』⁽¹¹⁾が出た。これは美的というよりも、むしろ心理学的研究である。一九七六年『スポーツ美学論』⁽¹²⁾という論文集が出る。これらの英米を中心にした諸研究、ならびに日本における数件の研究の検討をふまえて体系的な考察を展開したのが、拙著『スポーツの美学』⁽¹³⁾（一九八七年）である。このほか、直接的には芸術を論じる著書においてスポーツに対する言及が見られるものも若干数ある。（例えば大西克礼氏の『美学』、次節で取り上げる竹内敏雄氏の著作、渡辺護氏の『芸術学』、木幡順三氏の『美と芸術の論理』、『美学／芸術教育学』における増成隆士氏の論文等）⁽¹⁴⁾ さらに「スポーツの世相史」を特集した雑誌『正論』に載った増淵宗一氏のエッセイ「スポーツの美学」⁽⁴⁾も上げておこう。

これまでの内外の諸研究をふまえて、二つの基本的な問題を取り上げよう。まずは「技術美としてのスポーツ運動の美」の問題である。

二 技術美としてのスポーツ運動の美

スポーツの美と言った場合、通常思い浮かべられるのは、女子の新体操やフィギュア・スケートなどの華やかな演技であろう。さらに、ランニング・フォームの美しさなども加えられるかもしれない。いまここで問題にしている美の概念は、美学という学問の観点からのものであり、したがって、感性的直観にうったえて直接に体験される価値内容とでもいったように、かなり広く捉えられなければならない。もし、スポーツの美を体操競技やフィギュア・スケートなどの演技の問題に限定するとすれば、それはスポーツの個別種目の技術的な問題という性格を強く持ち、スポーツ美学などという総括的な試みは意味を成さなくなる。われわれが考えるスポーツの美の中には、陸上競技の短距離走のスタート・ダッシュの「すばやさ」や、バレーボールのスパイクの「強さ」や、柔道の寝技の「しぶとさ」などが含まれるのである。¹⁵

経験的にふりかえってみると、スポーツの美それも特にスポーツ運動の美は、運動の巧みさ、合理的な運動経過と関係があるように思われるであろう。スポーツ運動の巧みさとか合理的な運動経過といった問題を扱うのは、スポーツ科学の一領域である運動学である。例えばマイネルの運動学をみると、スポーツの運動経過の本質的特徴として運動リズム、運動伝導、流動、運動の弾性、運動の正確さなどが上げられており、これらの諸特徴が条件となって運動の調和がもたらされ、それは運動の美であるとされている。¹⁶ 逆にスポーツ美学の諸研究から美的なスポー

ツ運動の性格付けを引き出してみると、それらは流動性、リズム、スピード、技術、パワー、統一性、複雑さ、強烈さ、調和、均斉、つりあい、正確さ、タイミングなどであり、先の運動学によるスポーツ運動の本質的特徴の分析と符合する。このことから、われわれは、スポーツ運動の美はスポーツ運動の本質の現象形態であると考えることができる。スポーツ運動は目的性と経済性の原理に依拠しており、したがって、スポーツ運動が技術的な巧みさに支えられて、正確に、流動的でリズムカルに、そしてダイナミックに調和をもって、かつ運動課題に合致し効率的になされるとき、美的になると言うことができるのである。

このように考えると、スポーツ運動の美は、いわゆる技術美であるといえることができるであろう。しかし、単に運動学的知見にとどまらず美学的観点を有するわれわれは、この技術美ということに注意を払わなければならない。ここで、やはりスポーツの美を一種の技術美と捉える理解を示した美学者、竹内敏雄氏の見解を参照してみよう。

彼によって捉えられる「技術美」は、直接的には特に現代の機械的工作物に見出される美である。そして、技術美の概念が広く解された場合にスポーツの美もそれに含まれ、技術美一般が論じられる過程の中で一つの例としてスポーツの美が取り上げられている。竹内によって把握される技術美はあくまでも美の特殊形態であって、極端に特別な意味が技術美に与えられているわけではなく、現実在即して有用性と結びついた機能美として捉えられている。「競走・水泳その他の競技が生命力にみちた肉体の運動過程において人体美の精華をしめし、かつまた速力や腕

力のすぐれた選手が美的優越性をも有するように、機械的諸技術はその所産の運動相において最大限に強力な機能を發揮するとき、最高の美に達するのである⁽¹⁷⁾。人間の身体の構造や機能の法則性に沿いながら、マインエルらが言うスポーツ運動の「合目的性」に方向付けられて、すばらしいスポーツのパフォーマンスが展開されるときに見出される美、それが竹内が理解した機能的な技術美としてのスポーツの美である。ここでわれわれが注目すべきは、彼が、単純に機能を美と置き換えるような安易な機能主義的な見方をしりぞけているということである。速く走ったり、泳いだりするから、遠くへ投げたり、跳んだりするから、美しいのではない。竹内はスポーツに見られる機能美を「生命力」といった価値的なものへと結び付けている。「もとより有用性あるいは機能的合目的性がそれ自身のためによろこばれるのではない。われわれはそれが形態化されるところに機能的な力の緊張と充実が動勢をもって現象することに着目し、そこに『機能美』ともいふべき技術的对象に固有の美を享受するのである⁽¹⁸⁾」という見解は、速く走る競技者に美が見出されることに何の意味があるのか、といったことを考えるわれわれにとって示唆的であろう。この生命力という概念は、熟練した競技者だけでなく、たとえ技術的には劣っていても成長過程にある若さにあふれた競技者が、生命力に満ちた美を現出せしめることを理解可能にする⁽¹⁹⁾。

さて、スポーツ運動の美についての以上のような考察は、一般にはスポーツの美という「美的対象」の問題領域に属するものである⁽²⁰⁾。美学的な知見を援用して、美的対象としてのスポーツの美の素材、形式、内容

などを考えることができるであろう。例えば、「形式」の問題は運動のまさに「フォーム」の問題である。カール・ルイスと二流ランナーとのランニング・フォームの違いは何かなどという問題意識で、両者をバイオメカニクス的に分析しようとする研究などは、「美」ということを意識することがないにせよ、この美的対象としてのスポーツの美の形式の問題に関わるものである⁽²⁰⁾。

見る主体——見られる対象、すなわち美的体験——美的対象という関係の中で捉えられるスポーツの美の問題は、あたかも美的対象としての芸術作品の分析から類推的に理解される。それに対して、スポーツ体験の独自性と関連し、スポーツ美学という企ての中で特に重要な位置を占める問題が、次に取り上げる「スポーツ実践者の美的体験」の問題である。

三 スポーツ実践者の美的体験

——中井正一のスポーツ美学——

スポーツにおいて美的体験が成立するのは、第一に、前節の問題のように、スポーツ観戦者がスポーツ観戦において、眼前にくりひろげられるスポーツ事象そのものを観ることによる場合である。つまり、スポーツ観戦者が選手の動きを観て、美しいフォームだというような場合である。ところが、一方、スポーツ実践者がスポーツを実践することにおいて得られる美的体験を考えることができるのである。この問題について

は中井正一の論が重要であり、本節では、中井のスポーツ美学の検討から問題を浮彫りにすることにしよう。

中井正一は、京都大学で美学を学び、学生時代のボート選手などとしての自己のスポーツ体験から、第一節で示したスポーツの美についての論考を残した美学者であった。彼は芸術観照の静観の中に没するだけでなく、まさに行動の人であり、スポーツに対してもよき観戦者であるだけでなく、また情熱的な実践者でもあった。しかし、それだけであればスポーツを愛好する美学者というにすぎないが、中井は自らのスポーツの実践体験を美学のことばで語ろうとした希有の人であった。彼の論に対して特に注目しなければならないのは、何と言ってもスポーツ実践者の美的体験に関する論述である。現在、イギリスのスポーツ哲学者「J. アーノルドらによって捉えられる運動感覚的知覚による美的知覚」つまり aesthetic としての kinesthetic といった観点を、中井ははるか一九三〇年代の初頭に持っていたのである。

スポーツ実践者の美的体験とは、例えば中井が、

水泳の時、……長い練習のうちに、ある日、何か水に身をまかしたような、楽に浮いているようなところもちで、力を抜いたところもちで、泳いでいることに気づくのである。その調子で泳いでいきながら、だんだん楽な快い、すらっとしたところもちが湧いてきた時、フォームがわかったのである。初めて、グツタリと水に身をまかせたようなところもち、何ともいえない楽な、楽しいところもち

になった時、それが楽しいところもち、美感にはかならない。⁽²²⁾

と言うような、実践者が感ずる美感のようなものである。

中井はスポーツ実践者の美的体験を二つの要素から考察している。すなわち一つは、ボートのレースで「迫り来る敵艇のスパートをより鋭いスパートをもって引離す心持『これでもか』『これでもか』と重い敵艇の接近を一權一權とのがれゆく心境」と語られるような「競争性の美感」であり、もう一つは、「筋肉が、筋肉自らの行為をその内面の神経を持って評価し、そこに深い快適性をもって端的なる反省を為す」と言われる「筋肉操作の美感」である。⁽²³⁾ いま考察されている「スポーツ」が「身体運動による競技」であることを思えば、「競争性」と「身体性」（筋肉操作）が体験の内実をかたちづくる契機となることは容易に理解されよう。中井の論は、自己の生の体験、あたりまえの美感から出発している。そして、そのような実感を哲学的な考察の地平へと乗せ一つの美学思想にまで高めようとするために導入したのが、「気分」という概念であった。

中井は、われわれがスポーツに接するとき感じる、スポーツという場の雰囲気とかスポーツ実践の独特な感覚的な体験を「スポーツ気分」という概念によって捉え、その性格として空間的、共同存在的、肉体的技術的、時間的の四つを上げる。中井によって「スポーツ気分」と言われるときの「気分」という概念は、ハイデガーの『存在と時間』における基礎的存在論に由来する。すなわちハイデガーが「気分において現存

在は、すべての認識や意欲以前に、また認識や意欲が開示する射程を越えて、おのれ自身に開示されている⁽²⁴⁾と述べて、存在はまず気分においてあらわれるとする思想が背景になっているのである。しかし、この中井の「スポーツ気分の構造」という試みは、彼自ら言うようにハイデガーの存在論の思索様式を借りたものであり、内容的にも中井はハイデガーの論には限定的にしか依拠していないことは理解しておく必要がある。つまり、中井の「気分」概念は右で述べた「気分の開示性」に着目されて導かれたものであるが、またその点にすべてが集約される、それにすぎないものでもある。

しかしながら、自らのスポーツの実践体験から、それを或る種の実存的体験であるとし、その極めて捉え難いものを捉える射程の深さとして「気分」を取り上げたことは、やはり鋭い考察であった。芸術作品を観照するような、或る対象へと志向する体験とはかなり異なるスポーツの実践体験は、何か或るものを観察してそれに対して美的な体験を持つというようなものではなく、その言わば没対象性はまさに「気分」という概念がみごとに言い当てている。さらに、中井自身は気づかなかったことであるが、「気分」ということへの着目がより大きな問題への視野を開く可能性を持っている。それは、中井が「スポーツ気分の構造」の中でハイデガーの論に基本的に依拠しながらも、それはかなり限定的にしかなされず、ハイデガーとは無関係に、むしろハイデガーの意図したことがらとは対極的な地点へ中井の思索は進んだということに象徴される。ハイデガーの『存在と時間』を十分に消化しそれを忠実に辿り、思索の

範囲を言わば自由奔放に越え出ることがなかったら、おそらく「スポーツ気分の構造」のようなスポーツの美学的研究は結実していなかったであろう。ハイデガーの実存哲学を、中井は無意識のうちにも或る点に關して軽快に飛び越えていたのであり、それはいわゆる実存主義が直面しなければならなかった現代の齟齬した状況を、スポーツというような事象が或る種の方向に向かって抜け出しうることを示唆するのである。その方向とは、中井においては美的な方向であった。スポーツの実践体験は直接的には「気分」体験であり、スポーツという領域はそもそも美的な領域であるという中井の見解は、彼から半世紀の地点にいるわれわれにとっても、否あらゆる価値が相対化の中に解体されようとしている現代に生きるわれわれにとってこそ、スポーツという閉じられた絶対性の遊戯の美的な世界を明瞭に意識させるといふ点で、極めて示唆的であろう⁽²⁵⁾。

結語

筆者は、かつてスポーツ美学の問題領域を指摘した。この場合の問題領域というのは、スポーツをめぐる美学的諸問題が生起してくる問題の枠組みということである⁽²⁶⁾。それには四つ考えられる。すなわち、スポーツ観戦者の美的体験、スポーツ実践者の美的体験、スポーツにおける美的対象、そしてスポーツにおける美的価値の原理、である。この問題領域によって、スポーツをめぐる美学的諸問題のそれぞれの位置関係を確

認することができる。本稿の二つの問題、トピックは、前者は「スポーツにおける美的対象」の、後者は「スポーツ実践者の美的体験」の問題領域に属するものである。スポーツ美学は、この問題領域に沿って、スポーツの美の基本構造と美的価値の原理の探究をまずは課題とする。と同時に、スポーツの美の考察を進めようとする、言わば隣の美的領域である芸術が視野に入ってくる。これまでの美学の研究対象の中心は何と言っても芸術であり、それにはそれなりの理由がある。したがって、スポーツをこれまでの美学の学問的蓄積との対応の中で考察しようとしたとき、芸術との関連は避けて通ることはできないであろう。スポーツと芸術の関係、この問題も右の問題領域に沿って考えることができる。例えば、スポーツ観戦と芸術観照のそれぞれの体験の類似点、相違点は何か、スポーツ実践者の体験は芸術家のそれとどう違うのか、スポーツにおける美的対象を芸術作品の素材—形式—内容といった構造で解釈してみたらどうなるか、スポーツにおける美的価値の成立基盤と芸術におけるそれはどのように関係しているか、などといったようにである。

われわれは、直接的にはスポーツを観察している。しかし、われわれの観点からは、スポーツに隣接する領域である芸術が視野に入っている。そして、その芸術の周辺には美学という学問の蓄積がある。それは当然哲学などの諸学問との接触を持っている。もちろん、スポーツ、芸術のまわりには日常的な人間の生が広がっており、現実的な社会が存在している。——このような光景の広がり、差し当たりスポーツ美学なる企てが成立してくる基盤である。

スポーツ美学は実践的な学問ではない。それによって得られた知見が、われわれの現実のスポーツ観戦やスポーツ実践に直接的に関与してくることはない。スポーツは、そもそも遊ぶ、プレイするものである。しかし、恰ももう一つのゲームとしてスポーツ美学とかスポーツ哲学とかいった試みを考えることができれば、スポーツに対するわれわれの関与のしかたには幅ができ、スポーツに対するわれわれの見方も一味違ったものになるだろう。スポーツは、これまで例えば「体育」という教育との関連のもとに置かれがちであった⁽²⁷⁾。そういったさまざまな外的な束縛からスポーツを解き放ち、その愉悅に直面することを促すこと、このことがスポーツ美学などの基本的な意義であろう。本稿で取り上げた竹内敏雄とか中井正一といった美学者のスポーツに対する語り口は、まさにそのことを物語っている。

〈注〉

(1) 拙著「スポーツは芸術か?——ワットーベスト論争——」『体育・スポーツ哲学研究』第十一巻第一号、一九八九年、二七一—三九頁。

(2) スポーツと芸術の関連の問題の一つに「スポーツ芸術」の問題がある。スポーツ芸術とは端的に言えば、スポーツをテーマにした芸術のことで、スポーツ映画、スポーツ小説、スポーツ絵画などの総称である。スポーツ芸術への着目の試みは、それを芸術の一



レジェ：潜水する人たち
 (『現代世界美術全集15』集英社より)

つのジャンルとみなすことなどではなく、その意義は、芸術による描写を通してのスポーツ理解への寄与にある。ポッチョーニの「競輪選手のダイナミズム」やレジェの「潜水する人たち」あるいはヒュー・ハドソン監督の「チャリオッツ・オブ・ファイア」や井上ひさしの「突撃する女」から何を読み取るかは、それぞれの観照者あるいは観戦者に委ねられている。拙著「芸術によるスポーツの描写について——スポーツ芸術の意義——」(『広島体育学研究』第十一号、一九八五年、一五—二二頁参照)。

(3) スポーツ美学とかスポーツ哲学と言ったとき、スポーツ選手のスポーツに打ち込む心意気とかスポーツとの関わりを含んだ人生観などの意味で、「美学」や「哲学」が理解されることが少なからずある。そのような場合、スポーツ美学を語るにはその語り手が一流のスポーツ選手でなければその美学は本物ではない、などという発言が安易になされることがある。本稿でいう美学や哲学は学問としてのそれであって、さしあたって右のような美学や哲学とは一線を画する。われわれは、いわゆる芸術哲学や(芸術)美学に相当するようなスポーツ哲学やスポーツ美学を企てようとしているのであることは明示しておかなければならない。ピカソの人柄や人生観、絵画観が、芸術ことに絵画の哲学的省察に多くの示唆を与える可能性はあるであろうが、ピカソのような一流の芸術家でなければ絵画美の構造は語れないなどということは、芸術哲学や美学を少しでも学んだ人ならば言うはずがないであろう。むしろ、芸術という行為そのものと芸術の哲学的考察や美的探究とは次元が異なる営みと言うべきである。スポーツ美学やスポーツ哲学についてもそれと同様のことが指摘できる。

(4) 増淵宗一「スポーツの美学」『正論』五月号、一九八四年、七二頁。

(5) 例えば、Grube, O et al(Eds.) *Sport in the Modern World — Chances and Problems: Papers, Results, Materials, Scientific Congress Munich, August 21 to 25, 1972.* Springer-Verlag: Berlin, 1973.

- (9) Gerber, E. W. (Ed.) *Sport and the Body: A Philosophical Symposium*, Lea & Febiger: Philadelphia, 1972, 2nd Ed., 1979.
- (7) Osterhout, R. G. (Ed.) *The Philosophy of Sport*, Charles C Thomas-Publisher: Springfield Illinois, 1973.
- (8) Whiting, H. T. A. and Masterson, D. W. (Eds.) *Readings in the Aesthetics of Sport*, Lepus Books: London, 1974.
- (6) Lowe, B. *The Beauty of Sport: A Cross — Disciplinary Inquiry*, Prentice-Hall, Inc.: Englewood Cliffs, New Jersey, 1977.
- (10) 中井正一、久野収(編)『中井正一全集1』美術出版社、一九八一年。
- (11) 勝部篤美『スポーツの美学』杏林書院、一九七二年。
- (12) 体育原理研究会(編)『スポーツ美学論』不昧堂、一九七六年。
- (13) 拙著『スポーツの美学——スポーツの美的探究——』不昧堂、一九八七年。
- (14) 大西は『美学(上)』(弘文堂、一九五八年)の中で、運動競技(すなわちスポーツ)を手に汗を握って夢中になって観戦するような体験は美的体験ではないと述べている。この見解は、スポーツに豊かな美的体験を見出そうとするスポーツの美的研究とは対立するかのようであるが、逆になぜ美的体験ではないのかを彼の美学思想を通して考えうる点で意味がある。竹内の著作(註17)については後述。なお、竹内には、美学研究に打ち込む生涯で研究の傍ら書いた短歌形式の詩作を晩年に集めた歌集『審美歌篇』

- (弘文堂、一九八一年)がある。それには「競技美」と題される相撲、バレーボール、野球などのスポーツを詠んだ連作が含まれている。また、渡辺は『芸術学』(東大出版会、一九七五年)の中の「遊戯と芸術」の章で、ボール・ワイスなどを引用しながら、一つの遊戯としてのスポーツと芸術との比較を行っている。さらに、木幡は美学の入門書『美と芸術の論理』(勁草書房、一九八〇年)の中で、いわゆる美的無関心性の問題をわかりやすく説明するために競馬を例に使っているし、また『美学／芸術教育学』(勁草書房、一九八五年)の中で増成は、スポーツと芸術の類似を指摘している。
- (15) 勝部、前掲書参照。
- (16) Meinel, K. *Bewegungslehre——Versuch einer Theorie der sportlichen Bewegung unter pädagogischem Aspekt*, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1960. (金子明友訳『スポーツ運動学』大修館、一九八一年)
- (17) 竹内敏雄「技術時代の美学の問題」『講座美学新思潮四芸術と技術』美術出版社、一九六六年、一三頁。
- (18) 同書、四三頁。
- (19) 「勝つものは美しい」という言葉がある。その意味は、①勝つからには何か原因がある②スポーツの場合独特な人為的課題(例えばボールを一定の大きさのゴールに蹴り込むなど)を含んでおり、また極めて法則的な人間の身体性に立脚しているゆえに、そ

の原因をかなりの部分まで特定できる↓③それは法則的に或る方向性を持っている↓④その法則的な方向性がわれわれの感覚的には「美的」である、というように理解すべきである。この言葉から、勝つものだけが美しいとか、美的であるためには勝たなければならぬ、などという見解を導いてはならない。本稿の生命力をめぐる論述は、まさにそのことを指摘している。そもそもスポーツ美学なる試みは、一面的に美化されやすいスポーツを冷静に見つめ直すという立場に立っている。

- (20) 拙著「うごきの質・かたちの美——スポーツ美学からの断章——」『体育の科学』第三十五卷十一号、一九八五年、八一九—八二二頁参照。

- (21) Arnold, P. J. "Movement as a Source of Aesthetic Experience," In: *Meaning in Movement, Sport and Physical Education*, Heinemann: London, 1979, pp. 120—161.

- (22) 中井正一『美学入門』朝日新聞社、一九七五年、一—三頁。

- (23) 中井正一「スポーツの美的要素」四—三頁、「スポーツ美の構造」四三四—四三七頁、『中井正一全集』美術出版社、一九八一年。

- (24) Heidegger, M. *Sein und Zeit*, 1927, S. 136.

- (25) 中井、ハイデガーの論とスポーツ体験をめぐる「Heidegger's Concept of Authenticity and Sport Experience」なる研究発表を一九八九年のPSSS（米国ワシントンDC）で筆者は行った。

- (26) 拙著『スポーツの美学』三九—四二頁参照。なお、この問題領域

の観点からの諸研究の検討は、拙著「Problem Areas of the Aesthetics of Sport: An Introduction to the Aesthetics of Sport and a Survey of Literature, "In: *Bulletin of the Faculty of Education*, Hiroshima University, Part 2, No. 38, 1989. 参照。

- (27) 一般に「体育」と「スポーツ」の違いは十分に気づかれていない。日本語の「体育」は、広くかつ安易に sport, physical education, physical training などに対応して使われており、曖昧な語句になっている。体育とスポーツを短絡的に結びつける慣習が、スポーツに過度に教育色を付けたがるわが国の風土と関連があると筆者は考える。体育とスポーツは論理的に明瞭に区別されうる。その区別を導く「体育」概念の検討が、佐藤臣彦氏の「体育概念の哲学的基礎付け…序章——体育哲学方法論の探究——」『体育・スポーツ哲学研究』第六・七巻、一九八五年、を始めとする一連の論考にある。

(ひぐち・さとし 広島大学教育学部)